

それは何匹もの黒い大蛇だった。幾重にも締め上げられるので、トゥラスはついには倒れた。その上にもどんどん蛇がくる。

この蛇たちはトゥラスの知る蛇ではなかった。こちらの呼びかけには答えないし、彼らからはまるで声が聞こえない。まるで生き

物ではないようなのだ。こちらの意思も伝わらず、このままでは絞殺されるのは間違いない。かかった。

## 第二章 墓守と死者の泉

「さっさとどっかいきやがれ！」

トゥラスが叫んだ時だった。

「蛇らよ、去らねば斬るぞ！」

遠くでチュンオウの叫ぶ声が聞こえた。そう思ったなら、蛇がすっと引いていった。いままで締めていたのが嘘のように、さわさわと離れていき、洞窟の外に消えてしまった。

我に返って、トゥラスは弾けるように立ちあがった。

「お前か！」

目の前の墓守の男を睨みつけた。リビはすっと視線を反らす。

「……夜鷹の主あるじではなかったようだな」

「説明しろ！ お前の話し方はわけがわからない！」

飛びかかる勢いで言ったが、リビはすいとチュンオウに向き、優雅に地に片膝をついた。

「これまでのご無礼、お詫びいたします」

ますます意味がわからなくなってきた。チュンオウも、眉をひそめている。

「私もトゥラス同様、そなたの言うことの意味がわからぬ……」

「ご存じないのですね」

それならば、とでも言うように、リビは続けた。

「私の知りうる限りでご説明いたします。その前に火をくべましょう。立ち話にしては、長くなってしまいます」

リビは、岩を積み上げて作った釜戸に火をくべ始めた。

リビは身なりも整えた。釜戸に火をくべ、湯を沸かしている間にズボンも乾いたように、その上から薄い上着を着た。その上に、先ほどとは違うもっと豪華な布をまとう。そこから金色のごてごてとした飾り物を首にかけると、少し儀式めいた格好になった。それが墓守の身なりのようだった。

沸いた湯を、リビは木で作った椀に注いだ。

椀には乾いた葉や木の実が何種類か入っていて、熱い湯がそれをふやかすと、鼻孔を刺激する香が漂った。それをチュンオウが受取ると、トゥラスにも差し出された。

リビはチュンオウの前に座っている。トゥラスは釜戸の火の光が嫌だったので、少し離れたところで見ていることにした。

「チュンオウ様、あなたは石をお持ちですか？」

そう尋ねられて、チュンオウは首を振らなかった。

突然リビの口調が変わったのに気持ちの悪さを覚えて、トゥラスは目を細めた。

「お持ちなのです。私も、少し違う同じものを持っています」

リビが細い指で胸元の大きな首飾りに触れた。釜戸の火に照らされて、それは黒く輝

き、その奥にあらゆる濃淡のついた緑の光が閉じ込められていた。

「私はこれを精霊の石と呼んでいます。この世界には、この世を構成するいくつかの主要な精霊の石が存在します。それがあるのはご存知ですか？」

チュンオウは「いいや」と首を振った。リビは、口元を緩ませた。

## 第二章 墓守と死者の泉

「チュンオウ様がお持ちの石は、何色でしょう？」

「……黄色だ」

「見せていただけますか？」

先ほどの蛇のことがあったので、チュンオウもためらっている。それが伝わったのか、リビは穏やかな笑みを作った。

「先ほどの無礼はお詫びいたします。そうです、順序が逆でした。まず私の石から説明

いたしましょう」

リビは笑みをけし、まっすぐにチュンオウを見て説明を始めた。

「私のこの胸飾りは、代々ニンアズ、つまり私の一族に伝わるものです。いつ頃からあったのかはわかりませんが、私の一族はこれを受け継いでディングルの泉を守り、死者を弔い、また命を授ける役目を担ってきました」

なるほど、彼が外界の言葉にニンアズの意味を探せなかったのが理解できた。墓を守るだけではないのだ。

しかし、命を授けるとはどういう意味なのだろうか。会話を傍観するだけのトゥラスは、結局その疑問を口にはしなかった。

「私はこの石を手にした時から、不思議な声を聞くようになりました。それも、水に触れている時。飲み下した時には特に大きな声で。

彼らは言いました。私が水の化身であると」  
 自分の他に、人語意外を理解できるものがあるのには驚いた。多分自分が獣の言葉を理解できるのと同じ感覚ではなからうかとト  
 ウラスは思った。

第二章 墓守と死者の泉  
 「彼らの声を一度聞いてからは、その石がなくとも私は水の声が聞こえます。水は私にあらゆる知識を授けてくれるのです。このような精霊の石の話も、彼らの知識を借りたもの。そして彼らは私の意思も汲み取るようで、私の思った通りに動かすことができますのです。たとえば先ほどあなたの従者にしたように」  
 「俺は従者じゃない」

森羅万象の子  
 おっとしたので言ってやったが、彼は一瞥いちべつの間にとっけなく「それは失礼」と言っただけだった。それからまた、話は戻る。

「ただ私も人間なので、いづらか制限はあるようです。彼らの知を全て受けることはできませんし、変幻自在というわけでもありません。彼らはどういうわけか、蛇にしか姿を変えてくれないのです」

あの蛇、やはり普通の蛇ではなかったようだ。

「どうしてそんな力を使って俺を襲った？」  
 虎の眼で睨みつけてやった。獣ですらひるむそれを、リビは難なく受け流した。

「お前は光りが苦手だと言った。そこに引かかる場所があったから、お前を試してみただけのことだ」

リビはそうとだけ言うと、次にはまっすぐにチュンオウを見た。

「実は、今この世界で、力の均衡が崩れているのです」

「力の均衡が？」

「ええ」

チュンオウは身を乗り出した。

確かチュンオウは言っていた。この世界には闇が広がり、争いの火種をまき散らす国があると。その話に、なんとなく似ている気がした。

顔を陰しくしたチュンオウに、リビは落着いてみせて説明を始めた。

「この世界はいくつかの大きな力によって担になわれています。その力は精霊の石の数だけ。

私もいくつあるのかまではわかりません。水が私に教えてくれたことは、私が水の化身であることと、力の均衡が崩れていること。そしてそれは夜鷹の主が崩れているということ」

「夜鷹の主……」

トゥラスは小さく口の中で呟いた。水の蛇で酷い目にあっただのは、そいつのせいなのだ。

先ほどの一方的な攻められ方に苛立ちいらが蒸し返し、トゥラスは不機嫌に目を細めた。

「夜鷹の主とは、一体？」

チュンオウに、リビは首を振った。

「それは私にもわからないのです。水を浴びても飲んでも、彼らはそれを私に告げません。あまり言いたくないように感じられます。もしくは、私がまだ知るに値しない器なのでしよう」

「それで、とりあえずそれっぽいを見つけたら退治してやろうってわけか？」

皮肉をこめて言ってやったが、彼はあっさり認めた。

「そうだ。だからまずはお前が夜鷹の主なのかそうでないのかを、水に聞いてみたのだ。お前は夜鷹の主ではなかったが、それによって発見もあった」

そうして、リビは急せくようにチュンオウに言った。

第二章 墓守と死者の泉  
「石を見せていただけですか。私の水の蛇を退けたのは、明らかに精霊の石を持つ者の力のはず。どの精霊の力なのか、私が水に聞きましよう」

今度はチュンオウも頷いた。懐を探り、あの絹の子袋から指輪を取り出した。受取ったリビは、それを持って立ちあがった。それか

森羅万象の子  
ら立てかけてあった杖と、祭壇に置いたあの頭蓋骨を、愛しいものを抱くようにそっと片

腕に抱いた。

「こちらへ」

案内に着いて行った先は、洞窟の奥だった。そこは洞窟であるのに泉が湧いていた。天井は洞窟でふさがっているし、奥も行き止まりだ。しかし真っ暗なはずのそこには、光りが穏やかに満ちていた。

その光りは不思議と下から湧いていた。泉の中が輝いているのだ。春の青空のような淡い青の光だ。

とても美しい景色であったが、トゥラスは光から逃れるように身をすくめた。

「……輝く泉など、初めて見た」

チュンオウが感嘆を交えて言った。

「青の泉。見たままですが、私の一族は代々そう呼んでいます」



そう言ってから、リビは泉の端にひざまず跪いた。そして杖を、すっと水面に向けた。

薄目で見たリビの杖の先には、人の生首をかたどった琥珀色の水晶がついていた。口を開けた不気味な表情をしている。リビはその杖で水面を小さく打ちつけた。

第二章 墓守と死者の泉  
小さな波紋が広がり、水面が大きく隆起した。渦巻くようにリビの背丈の三倍ほど大きくなつたその水の柱に、リビは頭蓋骨を差し出した。水はそれを取り込むと、人の顔のようになつた。

「冥界への引導者、誕生の祭司を担うディンギルの泉が番人ニンアズを継承する者。また、気高き水の落し子リビ・サンリア。チシュバクの民の口を借り、その知を我に与え給え」  
儀式めいた言葉の後に、リビはチュンオウ

の指輪を差し出した。

「我らが母なる水よ、この石に宿りし精霊はどの力のものか」

水の柱から手が伸びて、指輪を掴まんだリビの手を包んだ。しばらくして水の手は引き、水でできた顔の口が動いた。

『鎮めの星の下、支える眼差しを持つ芽吹き  
の大地なり』

女のような声と思ったら、男のような声に変わり、また女の声へ。告げられたのは、たったそれだけだった。

水の柱は消えて、残った頭蓋が波でリビのもとへ返された。リビはそれを取り上げると、纏っている布でくるんで頭蓋の水を拭いた。

「聞こえましたか？」

指輪をチュンオウへ返しながら訪ねたり  
ビに、チュンオウは頷いた。

「鎮めの星……大地と言っていた」

「そうです。それから、彼らはこれが全ての

いしずえ

礎いしになるとも言っていました。いくつかあ

る力の中でも、それらの土台となり支える大  
きな役割があるのでしよう」

水を飲んだり浴びたりでも声が聞けると  
言う彼は、自分たちより多くの知識を与えら  
れたのだろう。トゥラスにはそこまで聞こえ  
なかったが。

## 第二章 墓守と死者の泉

「この石は大地の力を宿した石です。チュン

オウ様が大地の声を理解する時は、きっと訪  
れるでしょう。すでにチュンオウ様の声は大

地の精霊に届いている。だからこそ、私の蛇

はあなたの声にも耳を傾けた。私の蛇を退け

たのは、チュンオウ様の声だったのですよ」

チュンオウは、もう一度その手のひらの指

輪に眼を落した。水に濡れているからか、そ  
の色はさらに輝きを増したように見える。

この世界の土台。その精霊の力を宿した石  
がチュンオウのものなら、まさしく合点のい  
くことだ。気高く知識溢れるチュンオウこそ、  
礎の大地というものが似合う。

「そうだ、リビよ。そなたに見てもらいたい  
ものがもう一つあるのだ」

チュンオウはこちらに向いた。何のことか  
と、トゥラスは首をかしげてみせた。

「そなたも持っておろう」

そう言えば、と、トゥラスは胸元を探った。  
だがあれはチュンオウやリビのと違って、変  
な形をしている。

トゥラスが取り出した石に、リビは注目し  
た。

「お前も持っていたのか……？」



「まあな。そんな大層なもんじゃねえと思うが」

渡してやると、リビはそれをまじまじと覗いた。

「何だ、この色は……」

あらゆる色が煌めくその石を見て、リビは言う。色など、何か関係があるのだろうか。

リビはもう一度同じようにして、水の柱を作った。

「我が知の泉、大いなる水よ。この石はどのような謂れのある石か」

水が先ほどのようにリビの手を覆った時だった。水面全体がビリビリと小刻みに波打ったかと思ったら、リビが突然悲鳴を上げた。

「あああああっ！」

膝を折って、リビは頭を抱えて崩れた。

「どうした、リビよ！」

チュンオウが駆け寄ったが、リビの手は震えていた。

「おい、どうした」

さすがに心配になって、トウラスも駆け寄った。何度もチュンオウが声をかけると、ようやくリビはうっすらと目を開けた。顔にはまだ苦痛の色が残っている。

「一体何なんだ、この石は……！」

リビがそう言いつつ差し出した手から、トウラスは石を受取った。

「水は、何て言ったんだ？」

「わからない」

リビは顔をしかめてふらふらと起き上がった。

「その石はただの石ではないのは確かだ。だが多分、普通の精霊の石でもない」

「あいまいだな」

「聞こえなかったんだ」  
 まだ頭が痛いのか、こめかみ辺りを押さえ  
 ている。

「彼らの知は膨大すぎた。ただの人間の私に  
 は受け入れられないほど。まるで頭の中で甲  
 高い奇声は何重にも反響したようだった：  
 …」

泉のほとりに彼が目をやると、あの頭蓋骨  
 が水面に揺れていた。沈みもしないで、泉の

## 第二章 墓守と死者の泉

縁の水面の上に佇たたずんでいる。リビはそれを

抱き上げると、頭蓋骨の額に指で何かを描い  
 た。

「君は二度も使いになってくれたから、きっ  
 と素晴らしい生を授かるだろう。またこの世  
 に生まれてきたら、私に会いにきておくれ」  
 まるで彼ではないような、木漏れ日のよう

な優しい声だった。そのように告げると、リ  
 ビは頭蓋骨を泉の中へ落とした。頭蓋骨は青  
 空の底に名残惜しそうに沈んでゆく。

見えなくなるまで沈むのを見送ってから、  
 リビはようやくこちらに向いた。その目はす  
 でに鋭いものに変っていた。

「その石は、精霊の石よりも強大な力を持っ  
 ている。水たちの知こそ得られなかったが、  
 彼らの感情は伝わってきた。歓迎するととも  
 に恐れおののいていた。もしかすると、この  
 世の均衡に大きく関わるものかもしれない。  
 お前のその容姿も何かの手がかりなのだろ  
 う」

悪魔の子と軽蔑されたこの容姿が世界の  
 均衡と何か関係するのであれば、それはチュ  
 シオウに協力できるという意味なのだろう  
 か。

けれど、悪魔の子など、まるでチュンオウと応えた。

が消そうとしている闇の申し子のように、トウラスは複雑な心境になった。もしもリビの

ように石の示す不思議な力に目覚めたとしても、悪魔の子の自分にはチュンオウの考

ることは全く逆のことをしてしまいそうで怖くなった。

ぞくりと首筋を這った悪寒を振り払うと、リビがこちらをじっと見ているのに気が付

## 第二章 墓守と死者の泉

いた。まるで今の自分の思考が見透かされた心地だった。

しかし次に彼は、チュンオウへその眼差しを移した。それは今までのように鋭いと言うよりも、意思の灯る力強さが見受けられた。

「チュンオウ様。あなたはどのような目的で旅をなさっているのですか？」

チュンオウは一度こちらを見てから、堂々

と応えた。

「私はこの世に戦ばかりを広げる国に赴き、おもむ

それをやめさせたいと思っておる。闇を消し、光を探す旅だ」

自分には深く説明を加えたものを、たったふた言で済ませてしまった。それでもリビには理解できたようで、すぐにこう聞き返してきた。

「ヒェミチリアスですね」

その下を噛みそうな名は、トウラスも幾度かチュンオウから聞いた。チュンオウは、その国が世界の争いの元凶だと言っていた。

リビは知を水から得るだけのことはあつて、トウラスよりいくらかも世の中のことを知っているようだ。

チュンオウは深く一つだけうなずいた。

「私はこの世の均衡の崩れの原因を、その国に見ておる。精霊の石とは関係ないのかもしれないが、どうもあの国からは異様な力の膨らみが感じられるのだ」

「私も、あの国には目を付けているのです」  
リビは続ける。

「ヒェミチリアスは、最近になって勢力を増しています。あそこからやってきた水たちも、ひそひそと話しこんでいるのです。私にその声は小さすぎて聞こえませんが、あそこには何かあるはず。私もヒェミチリアスには一度行かねばならないと思っていますのです」

区切りがついたところでリビは何かを決心したかのように頷き、聡明な眼を余すことなくチュンオウに向けた。

「どうやら私の直観と水たちの予言に狂いはなかったようです」

「直観と予言？」

眉を寄せたチュンオウに、リビは答えた。「ついふた月ほど前に、従うべき賢人がやってくる。水は私に告げました。それも、従わねば自分たちは消されてしまうのだという恐怖と共に。ですから、水たちから賢人を見逃すなど忠告されていたのです。従わねば消されるとまで言うので、どんなに怖ろしい人物なのかと肝を冷やしていたのですが、安心いたしました」

そしてリビは微笑んだ。

「チュンオウ様、やはりあなたはこの世界の礎に選ばれるほどの強固な意思を持っていらっしゃる。采覇からここまで旅をされてきた行動力には感服いたしました。地は水を負かす性質であるのは事実のようです。その性質がゆえに水は怖れていたのでしょうか」

そこまで言い終えると、リビは片膝をついた。

「チュンオウ様。どうか私を旅の共にしていただきたい。水の教えに従い、この水の力をもってあなたの片腕となりましょう。水が私に見せた指輪の由来も共に敬服いたします」

指輪の由来というのがトゥラスにはよくわからなかったが、チュンオウの答えなら知っている。屈強だが柔和すぎるこの男は、なかなか拒むことをしない。

## 第二章 墓守と死者の泉

「指輪の由来までも見られたか……。ならば

ひざまず

なおさら、ひざまず 跪くのをやめていただきたい。

そなたは私の同志。同志として、旅に迎えよう」

リビはすっと立ち上がり、「ありがとうございます」と微笑みと共に言った。

「水の化身とは、頼もしい仲間が増えた」

チュンオウは手を差し出した。握手、というやつだ。

リビはそれに不思議な動作をした。少し前屈みになってから、眉間と鼻の先、口元、そして左耳から右耳へと順に親指の背を当てた。それからやっとチュンオウの握手に応じる。

「今のは何だ？」

トゥラスが聞くと、少しこちらに向いてリビは言う。

「私の両目、鼻、口、両耳によって得たものを全て偽りなくあなたへ、という意味だ。目の上の方へ信頼を示すことを誓う印だ」

リビはこちらにやってきて、手を差し出す。

「これより旅の同志だ」

握手だ。トゥラスはとりあえず応じてみた

が、やはり握手だけで、先ほどの信頼を示すだとかいう動作はなかった。

あまり気に食わないやつだから信頼などどうでもよかったが、無いは無いでやはり少し腹が立つ。まあいい。こいつと慣れ合おうという気は毛頭ない。そういう意味を込めて睨み返してやった。だがリビは気にもとめずに、チュンオウに向き直る。

第二章 墓守と死者の泉  
「ヒェミチリアスへはどのように行くおつもりですか？」

「このまま陸伝いに北の大陸へ行こうと思っておる」

ここまで来るには、トゥラスの住んでいた

森から東へ三月で砂漠、みつぎ十数日歩いて砂漠を

抜けて、さらに北へ歩いて二月くらいになる。ふたつき

この森へ入ってからは雨が多くて、あまり進めていない。

チュンオウはこの森を抜けたらまた木のない大地を行くと言っていた。しかし今度は砂漠ではなく、大地を緑色にするには充分な量の草があると教えてくれた。

「なるほど、そのまま足で行く経路ですね」  
そう言うと、リビは生首の杖で泉を指した。

「実はこの泉、湧水ではなく海水なのです」  
「海水……!!」

チュンオウは目を大きくしてしばたいた。そして「もう大陸の果てまで来ていたのか」と呟いた。雨のせいで普段の歩みが狂い、距離も定かではなくなっていたのだ。

「ええ。チシユパクの山の背面は、もう海です。この泉は海から流れ込んでいるもので、外の太陽の光りが海底で反射し、このような



空色の輝きをつくりだしています」

「海水ってことは、舐なめると塩辛いっていうやつか？」

リビは肩をすくめて「飲んで確かめてみるか？」と言ってきた。その言い方には嫌味のようなものが見られたが、結局は好奇心の方が勝ち、トゥラスは泉の縁へ向かった。ただしリビを一度睨にらんでから。

先ほどどうねってもいたし、髑むく髑が沈んだ泉だ。だから抵抗感があったが、美しい青色の泉を見ると、そのような気分も晴れてしまった。このくらいの光りなら目を瞑つむって我慢し

ようと、トゥラスは岸部に跪ひざまいた。目を瞑つむって水をすくうと、口いっぱい含んで一気に飲み込んだ。そしてとたんに、口や喉が痛く

て咳き込んだ。

「うっ……！　なんだこれっ！」

舌がぬるりとしたかと思ったら、口の中にぴりぴりといがいが広がった。自分の内側を全部洗いたいくらいだ。チュンオウが面白そうに大きく笑った。「これは辛すぎる！」と抗議してみるが、チュンオウは「海水は塩辛い水だと言っていたではないか」と笑った。

この舌だけでも何とかしたいと、トゥラスは舌を大きく出して顔をしかめた。からからになった喉が、空気に触れただけで咳を出させる。リビの呆れるため息が聞こえた。

「話を戻しましょう。ここからヒュミチリアスへの行き方ですが」

リビは杖でとんと地を突いた。

「このチシュパクには古い港があります。チシュパクの民は海に面する方に住んでいる

Yuki Tachibana

のです。私はチシュパクのニンアズなので、  
彼らとはもちろん面識もあり、顔も利きます。  
なので、海を渡ってヒエミチリアスへ向かう  
のはいかがでしょうか。一度別の港を経由し  
なければなりません、チシュパクの民は快  
く船を出してくれることでしょう」

「なんと！ それはありがたい！」

第二章 墓守と死者の泉

チウンオウの、細い眼の人柄のよい顔が明  
るなくなった。しかしトゥラスは、まだ気持ち  
悪い舌を出しながらため息をついた。このリ  
ビというやつに、旅の行方が左右されるのは  
面白くない。だがチウンオウがその方がいい  
と言うなら、反対する気もなかった。

森羅万象の子

ちょっと自分の気が悪くなるだけだ。我慢  
してやろう。自分には心通じ合う兄弟がいる。  
そういう意味で兄弟らからヒョウビを預か  
ってよかったと思ったのは、今日が初めてだ